

《せんがわ劇場演劇コンクール講評への、宮崎玲奈さんからのご意見についてのご報告》

第11回せんがわ劇場演劇コンクールの出場団体に対する一部の専門審査員の講評について、6月28日、参加団体の方から疑義を呈するSNSでの投稿がありました。

これに対し、せんがわ劇場演劇コンクール制作運営チームは、どうすることがベストかを考え、「せんがわ劇場演劇コンクールの講評の言葉は批評の言葉なのか」と声を上げられた宮崎玲奈さんと、指摘された箇所の主な書き手であった西尾佳織さんに、往復書簡という形で意見を交わしていただくことにしました。このやり取りはおふたりが終了と決めるまで続けていただき、その後、テキスト全文をせんがわ劇場のHPで公開する予定です。

ここに至ったのは、調布市せんがわ劇場は主催者であるものの、宮崎さんの抱いた疑問にはこまやかなニュアンスが含まれており、劇場が答えて解決に至るのはおそらく遠回りとなり、また、名前の拳がった西尾さんにも応答したいお気持ちとご意見があるだろうと考え、その対話の場所を用意することが、主催者のすべきことではないかと考えたからです。

と同時に、今回の宮崎さんの問いは「審査結果への疑義」ではなく、「講評という行為そのものへの問い」と捉え、これは公にして考える価値があると判断しました。

演劇のつくり手であるおふたりが、審査される／するという異なる立場を起点に、講評、批評をめぐる意見を交わしてくださるのは、コンクールという限定された時間と場所を超え、多くの人と共有すべき財産になるのではないとも思っています。

つまり私達は、宮崎さんと西尾さんに始めていただく往復書簡を、貴重で発展的な対話と捉えています。完全に意見が一致する着地点はないかもしれませんが、進んだり深まったり開かれたりするものが生まれると考えています。

私達のこの提案を了承し、それぞれにお忙しい中、協力してくださる宮崎さんと西尾さんに感謝します。

上記に関して、経緯と意図の詳細を説明いたします。

第11回せんがわ劇場演劇コンクールは、今年5月29日と30日の2日間に渡り、調布市せんがわ劇場で開催されました。本コンクールは毎年、劇作家や演出家、俳優など異なる職種の数名に専門審査員を依頼。以前より外部アドバイザーとして企画・監修を務めている徳永京子も加わって各賞を選定しています。

本コンクールにはいくつか特徴があると自負しており、ひとつが、コンクール参加者のうち希望者は、劇場の事業（公演の企画、創作、運営。地域の学校や施設への演劇ワークショップなどの派遣）に直接関わるチャンスがあること。もうひとつが、専門審査員だけでなく市民審査員がいること。そしてもうひとつが、講評を大事にすることです。具体的には専門審査員と徳永がひとりずつ、各参加団体について講評を述べます（多くの演劇コ

ンクールは、審査員は割り振られた団体について講評するに留まります)。さらに本コンクールはそれをテキストに起こし、後日、劇場のホームページに掲載します。これは、当日は聞き落とした部分なども参加団体に届けたいのと、そこに書かれた専門審査員の着眼点や言葉の選び方などが、多くの人々の演劇の見方のヒントになれば、という考えからです。加えて今年から、参加団体、専門審査員、市民審査員の三者が上演作品について意見を交わす「アフターディスカッション」を授賞式のあとに設けました。感染予防対策のため劇場の使用時間が限られ、アフターディスカッションは予定より短くなり、一部オンラインでのやり取りとなりましたが、講評、授賞式、アフターディスカッションは実施され、そこから約1ヵ月後、専門審査員の講評が劇場ホームページに掲載されました。

宮崎さんから指摘があったのはそのタイミングでした。

せんがわ劇場ホームページ

<https://www.chofu-culture-community.org/events/archives/456>

宮崎さん note

https://note.com/ririca_m/n/nb48f88f9b9ba

これを受け、調布市せんがわ劇場の担当者を含めた演劇コンクール制作運営チームで話し合いを進め、前述の通り、宮崎さんと西尾さんに往復書簡を書いていただく案を固め、おふたりの承認を得ました。この発表に至るまで、やや時間が経ってしまいましたが、この問題は丁寧に扱っていくべきと考えており、今後も終了の期限等は設けていません。皆さまには、関心を寄せていただきつつ、往復書簡の公開をお待ちいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

調布市せんがわ劇場

せんがわ劇場演劇コンクール制作運営チーム